

自粛と節約

というわけで、COVID-19がパンデミックとなっておよそ2年が経った。日本ではワクチン接種が進むにつれ感染者数は減少し、2021年末にはなんとなく安心感が漂っていたと思う。しかし、オミクロン株の登場で事態は一変し、再び急激な感染者数の増加に見舞われている。オミクロン株は感染力は強いが重症化しにくいとのことである（ウイルスにとっては感染力が高まり弱毒化することが遺伝子の保存に有利であろう）が、今後も個々人がこれまで以上の感染対策を行うことはもちろんであり、新たなワクチンや抗ウイルス薬などの開発が必要であろう。

2021年のノーベル物理学賞は、大気と海洋を結合した物質の循環モデルを提唱し、二酸化炭素濃度の上昇が地球温暖化に影響するという予測モデルを発表した真鍋淑郎さんが選ばれた。まったく関係はなかろうが、2021年4月には菅前首相が気候変動サミットで、国内の温室効果ガス排出量を2030年度に2013年度比で46%削減する新目標を表明した。また、2021年12月にトヨタ自動車も2030年時点でのEVの年間生産目標を、従来の「200万台（EVと燃料電池車の合計）」から「350万台（EVのみ）」に引き上げると表明した。大気中の二酸化炭素濃度の上昇が地球温暖化につながっていることは、今や小学生でも知っているであろう。

そんなこんなで、2022年はCOVID-19パンデミックへの対応と、地球温暖化対策（大気中二酸化炭素濃度の低下が中心であろう）の進展が望まれる。

飄

々

広報委員

川野 豊一

などと書いていたら、2022年1月15日午後トンガ王国の海底火山フンガトンガ・フンガハアパイ火山で大きな噴火が起こった。気象衛星の画像を見たが、驚きの一言である。トンガとは通信が困難になっており、被害などの状況がわからない状態が続いている。現地の安全を祈るばかりである。

火山噴火の影響は地域にとどまるものではない。1783年から1785年にかけてアイスランドで2つの火山が噴火した。膨大な量の火山ガスが放出され、成層圏まで上昇した塵は地球の北半分を覆って日射量を減少させ、北半球の低温化／冷害を引き起こした。遠く離れた日本でも天明の大飢饉の原因になったとも言われている。最近では、1991年のフィリピンのピナトゥボ山の噴火で1993年の冷夏となり、米が大凶作となったことが思い起こされる。今回の噴火も地球規模で何らかの影響が起こりうることは想像に難くない。

地震や火山の噴火、小惑星の衝突などについては人間が関与できることはそう多くないであろう。それと比べれば、感染症や温室効果ガス削減に関しては人間ができることが多いと思われる。庶民としては不要不急の外出を控え、無駄な電気を消しコンセントからプラグを抜いて回ることから始めようと思う。